
とある世界の一等兵

セイクー 〆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある世界の一等兵

【Nコード】

N7035P

【作者名】

セイクー♂

【あらすじ】

チート主人公は能力は原則無限、しかしテンプレによっていった先で文字通りやりたい放題、魔王と戦いません彼が手にかける敵は良くて中ボスレベル

でも無敵！

就活！（前書き）

主人公は戦いません

就活！

主人公の暁暁ことコウアカツキは今、セレン皇国という国の志願兵を試験する試験会場にきている、早い話し兵隊になろうということだ、歳は18身長は180と長身で見た目は黒髪黒眼で日本人特有な感じだ

そう主人公は日本人である、どうしてこうなった、かは追い追い話していくつもりだ

試験会場の受け付けには筋骨隆々な大男や、ヒョロ長で分厚い本を辛そうにもっている男など、多種多様な人たちが並んでいるコウもそれにならない自分の順番を待っている

コウは軽めの鎧を着て、腰には小太刀を携え、手には身の丈ほどの太刀をもっている。こちら辺では見かけない得物に周りの者は一瞥をくれる・がそれだけで視線を戻す

コウの順番がやってきた

「お名前と年齢そして希望職に印を、お願いします」

受付は早口にそういう、コウは一般兵に印をつけ要項を記入すると場所が言い渡されたので向かうことにした

進んでいくと広い整地された敷地があり看板には”演習場”と書かれている

そこには、甲冑で重装備をした男たちや、先程のところでも見たような筋肉質な大柄な男たちに溢れていた

コウはそのなかで好奇心な視線を感じながら隅の方に向かうと瞳をとじて静かに待機した

（脳筋ばっかだな）

コウがそんなことを思っているとお演習場の扉が閉まったどうやら試験がはじまるようだ

（だりい）

コウは多くの男たちが集まるところの少し離れたところまで行って状況を観察するように目線をおくる

「それでは試験内容を発表する、簡単なことだ、こちらで用意した兵士たちと集団で闘ってもらうそこで何秒闘えるを問う。30秒生き残れば合格だ、それ以上のものには段階にわけて階級を決める」

会場が一気に静かになったときそう兵士の男は言つと、再び騒がしくなる。コウはそんな様子を静かに見送る

「おい、なんかチヨロくないカ？」 「はっ、楽勝だな」 「俺が最高タイムを叩き出す」

そんな簡単なことだろうか、いやそんなわけがない用意される兵士は少なくとも集団で向かってこられても殲滅することが出来て尚且つ手加減出来るほどの実力があるものだろう

演習場の中央には50M四方の地面より1Mほどの高さの石造りの闘技場がありその上に突然と全身を黒に身をやつした男が現れる

「この男が今回君たちの相手をする、ではこちらが順番に呼んでいくので呼ばれたものは壇上にあがって来るように」

そして最初のもの達が上がっていく、説明していた男の「始め！」も声に壇上の男達はただ乱暴に黒い男に向かっていく、ほぼ同じタイミングである、黒い男は何処から出した長剣によって一太刀で切り伏せる

「全員失格」

その後も次々と筋骨隆々な男達は切り伏せられていった

次の日、コウは兵舎に来ていた、無論試験は受かった記録はジャスト30秒、時間まで長剣を避け続け30丁度の時に剣を弾かれて無事合格だ、コウ以外にも多数の合格者は出ている同じ一般兵の者、なかには兵曹に選ばれた者もいた

接戦のあまり試験を中断し役職は後日決定するという者もいた、正にエリートだな

もう一度言うがコウは一般兵に配属された、態々選んだのである。
戦場においては人海戦術のための捨て駒、軍の指揮系統における最
下層、いくらでも代えのきく職だともいわれる、そんな所にコウは
決まった

兵舎の正面、20人は行き来できるであろう大きな扉の横に比べる
と割りと小さな3Mのドアを開けて中に入る

「すいまつせん、先日登用試験に受かった者です」

管理人室という部屋の中に聞こえる様に朝暁がそう叫ぶと中では少
し慌ただしく物音がする、しばしば待つと眼鏡を掛けた男が現れた

「こんにちは、コウ」アカツキって言います」

「ご丁寧ありがとうございます、サイト」ヒラガスです、本日は
下見でございますか？」

コウが何も考えないで挨拶をすると中から出てきた男はお辞儀と共
にいう

「違います、自分は身一つですから、このまま入舎出来ますか？」

「問題ありません、部屋は20005ですね、案内はその掲示
板横にありますからご確認ください」

「あつざます、」

コウは、手をフリフリとして礼を言つと自室に向かう

就活！（後書き）

つぎはひ弱な動物（？）相手に戦います

ギルド（前書き）

主人公闘います

ギルド

コウは部屋を確認後直ぐに部屋を出て、街に出ていた

一際幅がある大通りを歩きながら目的地に向かっていく、コウは今所謂ギルドに向かっているのである。国家機関である軍の兵であるコウが、曲がりなりにも民間経営であるギルドにて働けるのか？ 答えは是である一般兵であるコウは問題なくOKである、無論將軍等の所謂重鎮であろう役職についているような者は門前払いをくらうことだろう、そもそもそんな人達は入ろうとなどしないが

大通りには、両脇には王都ともあって俗にいう名ブランド店が軒を連ね、その間を食べ物や安価小物雑貨などの露天などが犇^{ひし}めきあっている

（財布に余裕が出来たら本格的に見て回ることにしよう）

コウ行き交う人々をかわしながら思うほどにそれは賑やかに栄えていた

大通りが急に開かれ、軽い広場のような区間入ったらそこが目下目指していた場所である、円形に開かれている敷地の中心に立って南北大通りが通り北東・南東・南西・北西にそれぞれギルドが立っている。北から時計まわりに

剣帝の剣 賢者の骸 天使の歌声 大地の咆哮という、各ギルドに

は特色があり、同じギルドに所属していれば大体の性格までわかってしまうほどで、この四つは四大ギルドとまで呼ばれている、詳しくは割愛するがこの中でコウが所属出来るのは現在3つ、なぜかそれは天使の歌声は女性ギルドと言いつまりは女性しか所属出来ない決まりだからだ

コウは小さい紙をとりだしその上にたて棒を3つ書くとそこに横棒を書き足していく、そして縦線のそれぞれの下にN E S E N Wと書く、アミダくじの出来上がりである

く
く
く
く
く
く
く

鼻唄混じりに決まったのはN E、つまりは剣帝の剣である

コウは静かに北東に向かっていき、木製の巨大な扉を開けてなかに入っていく、内装は小粋な酒場のような雰囲気でおレンジ色のライトが静かにも明るい印象をもつ左右に依頼が張り出されているだろう掲示板がり高さ4 M横は一階のフロアの奥まで続いている、奥で依頼を見ている人の姿はどんな格好をしているかわからないほどだ、同じくフロアの中央には長机が置かれており朝から酒を煽っている男もいる

天井は吹き抜けになっていて二階のようすもつかえるが余り一階と変わらないようにもみえる、そんななかを奥にひた歩いていくと長いカウンターがありメイドさんのような服をきた女性が横一列に

並んでいるところにつく

「新規で登録を頼む」

「畏まりました、こちらに要項を記入の上会期の旨をご確認してもらいましたら承諾頂いたら、こちらが用意致します実力調査を行いましたらギルドランクを決定しまして、完了です」

コウが空いているところの女性に用件を伝えたと早口でこたえが返ってきたが気にせず渡された紙をみる

名前 年齢 魔力量 属性などを書く、女性に伴って移動する

地下に降りると第一試験場と書かれた部屋に入る、中は闘技場の様になっている

先ほどから静かに無口を貫いていた女性が口を開く

「それでは試験を始めますが、その前にご説明致します。

こちらで模範的に造り出しました、疑似魔物と戦闘して頂きます魔物は倒していけばランクが昇っていき降参もしくは敗退した段階にて、

考査をさせていただきますたら終了です。最初の疑似魔物に敗退しても登録は致します無論ランクは最低ですが」

「承知しました」

「では始めます」

女性は闘技場内にあるパネルのようなものを操作する

コウは闘技場の中央辺りまで進むとそれに合わせたようにコウの目の前に魔力の奔流が現れる

闘技場全体に震動が響く、魔力の奔流の方からコウのほうに向かつて暴風が吹き荒れる、見えてきたのはライオン、しかし規格があきらかに違う全長が8Mぐらいもある

（えっ？これがこの世界の最低ランク？年齢資格は13歳だからそんなガキもこれと闘うのかよっ！）

コウは疑問に思う、そもそもライオン？のての一つの爪だけでコウの顔ぐらいはある

「す、すいません！、どうやら実験段階の魔物が出てしまいました！。実験段階なので制御が効きませんっつ！！」

先ほどまで営業スマイルしか表情に出さなかった彼女が声をあらげるほどのことなのだろう

ヴオオオオオオオオオウツツ！！！！！！

そこに獣の咆哮が響く

「奴さんは待つてくれないらしいッ！」

ライオンは前足を闘技場にめり込ませただけの動作でコウにその顎をだらしなく開けて食らいつく、コウは無論それを避ける一気にバックステップで距離をとるいつでも闘えるように刀をだしていたのが功をそうしてそのまま攻撃に移れる

「グオ？」

その身に合わない声にもならない唸りをあげるライオンは恐らく回避を予期していなかったのだろう

「ハアアッ！」

コウは膠着しているライオンに接近する、首を伸ばしているライオンの顎のしたに潜り込むと手に持つ刀を同じく下から突き刺す刀はそれほど深く刺さることはなかった、しかし襲いかかる突然の痛みはライオンのその巨体を仰け反らせる

「叫び声をあげる暇はあたえないぜ。 s h a m g u n g n i r」

腹部を躰わにする獲物にコウは右手をあげるとそこに球体の光源が生まれる、それは形をかえてランスの形になる。

コウはそれをライオンの腹部に投擲する、伝説の神槍を模造したものと銘打っているそれはまっすぐに腹部に刺さる

繰り返す、次々ランスを形成する魔力の塊を連続して投擲していくそして一際大きな、それこそライオンの全長ほどのランスを止めとして脳天に突き刺す

静かに崩れ落ちるライオン、ライオンは現れたところから録に動かないうちに殺された、巨体は光だすとその光が小さくなるように消えてく

ライオンをメッタ刺しにしたコウの体は反り血に濡れている

「対象は沈黙、ミッションコンプリート。」

つぶやくと女性に目を向ける、彼女は呆然とことの顛末を見ていた
ようだが口を開けてその目には光がともっていない、呆然自失

「……えっ？」

恐喝紛い（前書き）

主人公戦いません

恐喝紛い

「えっ？…だつてあの検体はギルドマスターが試験的に倒すように決められてた…」

女性はブツブツと呟くように疑問を溢して未だ混乱していた、時間にして一分半ほどのことだ。そろそろコウは待つことに飽きている

「おーい、大丈夫か？」

たまらず声をかけながら肩を揺らす

「あつ、すいません。この状況は自分では処理しかねますので今上の者に掛け合いますの少々お待ちください」

なんとか体裁を保ち言つと、念話をしだしたようで少し虚空を見ている

コウはその隙に少し離れたところに放置されている刀を拾いにいく、そして血だらけとなった上着を脱いで新しいものを虚空をつかむようにして取り出してきた、フード付きのローブはそれを被ることによりほば顔を隠す

そのとき試験場の扉を開いて男が入ってきた

「あつ、来た」

その男は中央まで来るとコウを一瞥すると女性に顔を向けると確認をとるような表情をする

「つで、俺の試験はどうなるんだ？」

コウはさっきから思っていたことを言う

「ああ、俺はこのギルドのマスターのジェンツ「パールだ、君の試験だが正直あれはまだ試験段階の検体、正確な試験はできない」

「俺の試験はやりなおしか？、まあ特に疲れているといえることもないやりにおしても構わないが」

コウの言うことは本音だ血まみれになってテンションは下がったがそれだけで他は好調であるのが現在の状態だ

「そうじゃない、あれは一樣の強さはわかっている、どうだ、いきなりですまないが高ランクからスタートというのは。実は今人手不足でな無論多少の研修的なものは設ける」

「…なにが忘れていないか？」

「なにがだ？」

「確かに結果的には俺は検体とかいう奴を倒せた、しかし俺倒す前の状況で下手したら最低ランクの男かもしれなかった。命を脅かす状況にいたんだ、ギルドが何らかの形で責任をとらないのであればその提案には乗れない」

「ぐっ、確かに今回のことはこちらのミスだ、その代わりに前代未聞のSランクスタートとするのでは「俺は当面の生活が少し豊かになればと、来た、つまりは最低ランクのFスタートでも構わない、それでは釣り合わない」

マスターの言葉を遮るようにコウは告げる

「うっ、何が目的だ」

「簡単なことだ、まず、危険の代償として、さきほどあの女はマスターが対峙する筈だったということを言ってい、なのでギルドマスター資格のSSランクの最低報酬と同額を払って貰う、提案は受けてもいいだが俺は好きなきにしか依頼を受けない、これはギルドの失態への代償だ」

「そんなもののめる筈がないだろうっっ！」

「嫌なら俺は他のギルドに行って登録するだけだ、そこで順当に依頼を受けていけばそのギルドはさぞ繁栄するだろうな、いきなりSランクのランカーが入るのだからな」

ちなみにコウの前職は弁護士で、権利や義務については少しうるさい

「あああああっっ！！わかったよ。Sランクに登録、依頼には拒否権を有す。あとでSSランクの最低報酬を渡す」

コウは見事にギルドからカツアゲして、半年分の生活費に相当する金額を苦もなく手に入れた

「マスター以外にバカだったな」

今コウはギルドの受け付けに戻り報酬とSランクのギルドカードを受け取っていた、聞くところによるとほとんど店で支払いに使えるらしい、一応約10万相当現金にしてもらった

ちなみにここら辺の通貨は、下から銅貨 銀貨 金貨 銅板 銀板

金板 そして国家間でしか取引されないミスリル金貨がある
約10万相当だと、銅貨が1000枚、銀貨10枚 金貨にする0、1枚になる

もうすこし貨幣システムを変える努力するべきである

「早速だが、依頼受けとくか、暇だし」

コウはそう独り言をこぼすと、今度は二階に上がっていく。

二階には一階よりも数は少なくなるが高ランクの依頼が張り出されている、主にBランクだがコウからしたら周りが決死の覚悟で受注する依頼でも調度肩慣らし程度、「試しにやってみるか」レベルである

掲示板には見やすいように等間隔で羊皮紙に内容が書かれた依頼がはってある

試しに適当に手に取る

どうやら魔物の討伐依頼で、討伐対象はスチルゴレムでAランク、
距離も今日中には帰れるだろうてごろな位置だ
コウは一応これに決めた

受け付けに戻ると受付嬢に渡して正式に受注する

恐喝紛い（後書き）

次回、動く彫刻と戦います

もっと熱くなれよおおおおおっ！……！（前書き）

主人公闘います

もつと熱くなれよおおおおおっ！！！！

セラム皇国はより北に向かうと少ししたところに旧鉄鉱山があり、なんでも皇族の世代交代や新しい金属資源の発見などの理由で凡そ三世紀ほど前に廃鉱となっているが、現在でも当時の採掘村には未だ集落が残っている、新しく興行地として盛り上げる為に再び鉱山を利用するらしい、300年の時間により魔物が生息してしまいそれらの討伐を依頼したが、最深部には鉄鉱石に身をやつしたゴレムスチルゴレムがいた

コウは旧採掘村ウジミナスへと来ていた、ウジミナスは今度の再建に向けての計画の為に非常に賑わっている、大工などの専門職の職人や、何やら指示をだしている若者など、女性なども手伝いに駆り出されておりてんでこ舞の様子だ

村の門を潜ると、こちらに視線がささる

先程の指示を出していた青年が近づいてくる、何か不味かったかとコウは身構える

「すみません、この村になにか御用ですか？」

後ろの人たちは作業を止めてこちらを見ている

「ああ、スチルゴレムの依頼を受けてきた」

「ホントですかっ！、自分はこしら辺の地域を取り締まってるケント＝パールです。みんな待ちわびていましたよ、今廃鉱までご案内します」

ケントは早口に言っつて更に早足で歩いていく

「コウ＝アカツキだ、パールっていうとギルドマスターの？」

「はい、ジェンツ＝パールは父です、父とお知り合いなのですか？」

「今日知り合っただけだが、君の方がしっかしっているな」

（だからこそあんなに巻き上げることができたのだから滑稽だ、しかし統治をしていることは政府の…。再開しないことを願うな特に兵でいるときには）

「そうですね、しかしホントありがとうございます、鉄が手に入らないと作業も録に進みませんから。」

「礼を言われるのは全て終わってからだ、…ん？ここだな」

話していると、見張りのような甲冑の男が二人立っているところまでくる

「はい、ここです、自分は文官なのでここまでしかご案内出来ません、中は一本道です、すいませんがお気を付けて」

言いながら軽く頭を下げるケントを背に中に入っていく

中は3M四方のトンネルが奥に続いている、左右には松明を灯すようなものが設けられている

「よし、ここならいいだろう、 “ c i r c l e ”」

（俺の今の限界は半径50M、これなら奇襲を受けても寝てても反応できるな）

コウが唱えると彼の体の調度丹田の位置を中心に球状に薄紫色の膜が広がる

（今度系統を調べるべ）

コウの頭の中にはその膜より内側の情報が詳しく入ってくる

（つつか、深いところまで見ると鉄鉱石以外の鉱石もあるな黙って取ってバレないな、多分深すぎて到達できないだろうし）

程なく進んでいくと開かれた所に着く

「お出でなすった」

更に奥の方から轟音を発てて人間の、侵入者の匂いを嗅ぎ付けて来た色は暗くて判別出来ないが大きさは縦に10Mもあり近付いてくるだけで地響きが酷い

「先手は渡さない」

コウは“circle”をといて武器を消し去る、今度は体の線に添う様に薄紫色のオーラを纏う

スチルゴレムは走って向かってくる、そのスチルゴレムの頭部に飛び蹴りを喰らわす、スチルゴレムのその数十?の巨体はあり得ないことに飛び蹴りとは反対方向に吹っ飛ぶ

「飽きたな、つうかこれ用途が少なすぎるそもそも超人的すぎる、発を考えるまでー封印だな」

スチルゴレムがぶっ飛び悶えている間にコウはどう倒すかを考えている

「叩き潰すか」

そう言つてコウは虚空から大鎚をとりだす

「こいつは鉄より遥かに固いぜ?そのかわり思いがな」

大鎚から手を放し地面に落とす、叩くところだけで80CMはあり身長ほどある大鎚は持ち手のところまで埋まってしまった

コウは再び持ち直すと、大鎚に魔力を流す 大鎚からは蒼い業火が溢れる、業火に照らされるゴレムの色は銀、火の光に対し鈍く光を反射する

コウはスチルゴレムに接近すると、とにかく殴る、頭 右肩 下腹 左肩 胸、段々業火によって熱せられていく、やがて真紅に輝

きだすとその色を体に刻みつかせたまま死んだ

「完了、じゃあ鉱石を錬金術で集めたら帰るか」

もっと熱くなれよおおおおっ！！！（後書き）

つぎは、訓練として人と戦います

初出勤 初訓練（前書き）

前話から間が空いてしまったこと、ネタバレですが当初の予定を大幅に脱線し今回は戦いませんこと
お詫び申し上げます

初出勤 初訓練

ケントゥーバールに依頼の成功を知らせたあとコウはギルドに帰り報酬を貰った

ちなみにこれでコウの所持金は約25万相当になった、命を賭けて戦って十五万ってどうなんだろう？と思ってギルドをでる

コウは軽く飯をとって兵舎に帰り床について、そして眠った

既に書いている貨幣価値だが、これに現代の貨幣と比較してしまうと随分と大まかになっているがこれはこの世界での物価に係してくる、例えば生活必需品の青果などの食材は単体では銅貨を幾数枚で事足りるし更にはまとめ買いが共通概念となっていたりするので支障がないので銀貨で事足りて、武器などは金貨で払い釣りを貰わないと銀貨を大量所持しないと買えないほど高いので全体的に庶民にしても貨幣価値は理にかなっている

そもそも金貨まではそもそも小さなもので重量的に多く持っていてそれほど重くはない

翌朝、本日から正式な雇用が始まり、各部隊に別れて訓練が開始される、コウの階級である一般兵での職務は簡単なものだ朝から夕まで訓練を週に連続で五日間行われ後は非番、いざ戦争で駆り出されれば敵国兵を殺す。

与えられる給料の代償は日々の訓練に於ける研鑽と戦争への参加のみ。

権利はなにもないが義務も存在しない、例えば上官の命令は絶対な
どはない、国のために死ねとかいわれても従う必要もない

「ええー今日から本格的に訓練をして貰うわけだが、訓練の内容はその日の教官次第で順次改変されていく、しばらくはこの私のままだが、今日から数日間基礎を徹底的にやってもらう、まずは、訓練所に敷いてある魔法陣とこちらで用意した武器で模擬的な乱戦をしてもらうこれにより致命的と判断される攻撃を受けたものはリタイア、その後の訓練で付加を掛けて貰う、撃破数10人で自動的に休憩に入って貰う、質問は許可しない、ちなみに制限時間もあるので制限時間を終えた時点で撃破数を満たさない者も負荷を負って貰う」

コウは両刃の長剣を選んで手にとっている

「それでわ、はじめっ！」

号令と共に全員が動き出す、近くににいる者を手当たり次第に討つ算段の奴らばかりだ、コウにもその刃が降りかかる、三人から同時に攻撃がくる右前方、真左、右後方その三人にも数人から攻撃が来ている

（乱戦ってよりは、混戦って感じだな）

体を振る様に回避する、周りはコウを中心に、コウとは関係ないところで攻撃が当たり合う

（まあ落ち着くまでは回避だけすれば、問題なく凌げるな）

兵士の持つ武器の攻撃は魔法陣の内部にいる者の体には触れられない、攻撃の通過した箇所を関知しダメージを換算、急所は一撃でリタイヤ、四股などに攻撃を受ければその箇所は痺れが走り機能しなくなり、例えば両腕両足を打たればリタイヤだ、武器同士はぶつかり、防御は必ず武器でしなければならない

それから訓練場の中をひたすら走らされること4時間ずっと全力だ
無論、速さには差が生まれるが必死さは変わらないように、手を抜くと自重が変わるように細工のされた腕輪をつけられる

脱落しないものはいないなぜなら全力だからだ、とりあえず体力はあるに越したことはないので真面目に受けたのが愚かだった

教官がいうには、少し力を緩めて自重に負けないほどの筋力がついてくれば充分余力を残して走りきれるようになるらしい、もっともこの話しがでたのは終わりの時だったので聞くことが出来たのは俺を含めて十数人ぐらいだろう

そしてやつと昼食だ、午前の部が終わり意識があるものはおよそ自由解散なのでそのまま食堂に向かう

「君も訓練耐えたんだね」

重たい足を引きずりながら歩いていると後ろから声をかけられる、振り替えると長身の優男が立っていた汗一つかくことなく、爽やかな笑顔を振り撒いて

「ああ、だがなんのようだ」

不愉快な表情をそのままに怪訝な眼でこたえる

「そんなに警戒しないで欲しい、僕はカイル・ウィングベルだ、あのしごきを初日から耐えた君に興味が沸いたんだ、是非友達になつて貰いたいとね」

「……………あの訓練を耐えたのはお前も一緒だろう、挙げ句汗一つかいてる様子もない、あの腕輪に魔力を流したか、身体強化をしたのかは知らんが魔法使いなのに一般に来たのは明白だ。それに他にも耐えきつた奴等もいるであろう」

「彼らは既に知り合いなんだ、それに昼食を共にするくらいいいじ

やないか」

「まあいいが、静かな方みたいだしな。コウアカツキだコウでいい」

それほど距離があるわけでもないのでそうして話していると食堂に着いた

「この食堂にはこの軍に在籍してるすべての兵士がくる無論弁当を持参するひともいるが殆どの兵がいる」

「つまり階級に基づく格差があるんだろう？、予想の範囲内だ」

・・・

二人の手には量だけは特上の食事をもって食堂の外に来ていた

「じゃあ食べようか、そういえばさっき話した知り合いが後でくるけどいいかな？」

「何人かによる」

「ああ、三人だよ」

二人は食べながら会話を続ける

「そついえば友達になってくれるのかな？」

「まあいいが、貴族のウィングベル様がなんで一般兵にいるのか…
少しうたってもらおうか」

「いいけど様はやめてよ、あと悪役口調もだけど。簡単なことだよ
貴族の軍に入ったら一般兵に入って己の武勇で昇進しなきゃいけない
んだ、これからくる三人も貴族なんだ」

「ふん、まあいいけど、俺のダチになるなら条件があるぜ、酒は
たしなむが絡まない、これだけ守ってくればいい」

「うん、じゃあよろしく」

軽く握手を交わすと、こちらに近付いてくる人の足音が聞こえた「
あつ、来た来た」そう横で言ってるのが聞こえる、歩いてくるのは
言われていた通り三人組であった、背の高い眼鏡をした男 赤い長
髪の子（ルークか？）そして小柄なネコ目の女の子（めがつさ睨
んでくる）

「おおカイルここに居たのか、でそいつは誰だあ？」

「紹介するよ、今友達になったコウアカツキって言うんだ、でこ
っちがロインネットセイント、グラムセントクエテッサ、レ
インフレームだ」

「まあ、よろしく」ちよつと誰よその平民は？」

コウが挨拶をしようとしたのを遮って言ったのはレインだ

←コウ

「ちよつ」誰つて、今紹介したじゃないか、あの扱きを耐え抜けていたから声を掛けたんだ、調度今友達になったところさ」

「へえ、カイルが友達になるのは勝手だけど、あたしには関係ないから」

レインはそう言うときつぱを向いた

（なんか俺を抜かして話しが進んでるんだけど…）

「まあ、レインはああ言ってるけどよろしく仲良くしようぜ？」とりあえずは飯にしようぜ」

とはグラムセント、曰くグラムと呼んで良いとのこと

「そうだな俺も、よろしく」

と握手を求めたのロインネットで、こちらもロインで良いらしい

それから軽く雑談をしながら、昼食を済ませて訓練所にもどる、因みにこの間レイン＝フレームは口を開かなかった

初出勤 初訓練（後書き）

前述の通り戦闘の「せ」の字も出ませんでしたね、すみません
とゆうことで次回また主人公はギルドに行って大暴れします

洞窟にて（前書き）

主人公闘います

洞窟にて

訓練所に戻ってから、訓練は実に単調で、でも体力・耐久力共に消費する過酷なものだった、貴族のエリート組も最後には立つのも辛くなっていたし、無論コウも例外ではない

内容は機会があれば書くとする

翌日、筋肉痛とまではいかないが、倦怠感が残るコウは、再びギルドに来ていた

「ああ、ダルい」

コウがギルドに来たのはひとえにあれが毎日繰り返されることを思えば、さっさと訓練に耐えられる様に鍛えるためだ、訓練のための訓練とは滑稽だ

コウは一つの依頼を手にする

討伐対象はストーンウルフ、数は200以上

ストーンウルフは硬い石のような体躯をもつウルフで、依頼のランクはSだ、主に数がランクの原因だ

その依頼を受注するとギルドを出ていく

来たのは前回の依頼と同じ廃鉱だ

前回とは違う入り口から入ると、そのさきに群生しているらしい、昼間でも視界のない廃鉱を松明に光を灯しながら進んでいくと光に誘われて討伐対象外のモンスターが出てくるのでそれを片付けながら進んでいくと、顔面にむかって三体の蝙蝠が襲ってくる、体長が1m強ありキラバッドと呼ばれ、一体だとEランクで、ギルドで稼いでもない一般人でも倒せるランクだ

無論コウの相手ではない、一刀を以て斬り伏せるとそのまま進んでいく、すこし拓けた場所見えてきた

ストーンウルフの体皮は実際は石そのものではなく、それでいて硬度や粘性の度合いは石に酷似しているっがその真正体は解明されていない

コウは、拓けた場所に集っているウルフを見つける、その数は350は上回っていることは確かだ、実際に過去に採掘の作業が行われていたと思わしき場所に、正に蠢いている

（こちらには気づいてないようだな、今回は決めていた通り体術a
nd念縛りでおk）

両手に小太刀を二本送還する、送還する際の微量な魔力に反応したのかウルフの一部がこちらに気づく、ウルフと眼が合いコウが走り出すのと、侵入者への迎撃の雄叫びをあげるのは同時だった

前方、比較的狭い坑道内を、やはりタイミングはコウが幾らか速く駆け出すと、向こうは20体が迎える、接触の一手手前で右足を前に強く踏むと、そのまま弧を描いて20体を飛び越え、小太刀にオーラを纏わせ刃状に変化、纏わせたまま振り抜いて20体を難無く切り裂くと、転じてウルフの後続組が来る前に袈裟・逆袈裟とふると刃状のオーラの先端の軌跡に沿って出来た三日月がたのオーラ（斬撃）が飛んでいく、斬撃に触れた空気を操作して、斬撃は真空の刃となり次第に肥大しながら飛んでいく、全体の5割りを切り裂き採掘場の壁に当たる前に霧散させる

（対人戦でやったら、能力者はいないだろうから大量虐殺だな）

残る5割りの中に突撃して小太刀の周りに刃状に変化させたオーラ

を纏って振り回す

（軽さは変わらないから、凄くくだな双大剣士ってところか）

周りからほぼ同じタイミングでストーンウルフが飛びかかって来るのをその場で回転することですばやく一掃する、ウルフは先程同胞5割りを一瞬で殺されて呆然自失になっているのだろう、ただ飛びかかるだけでこちらは動かなくても集まってくる

（刃の鋭さを意識しているだけでスパスパ切れやがるから、やべえなんも苦労しねえ、少し気の毒だね）

右からくると同時に後ろからも、体を捻る時には前からくる、右を斬りそのまま後ろを向けば右の屍をこえてもう2体飛びかかってくる、後ろをスナップだけで袈裟斬りに同時に前を横薙ぎに斬りそのまま体を捻り右を斬る目まぐるしく斬り伏せていくとやがてウルフはすべて屍になっていた

「結構オーラ使ってしまったな」

ギルドに登録すると、契約の精霊の力によって、倒した魔物を記録し依頼の達成や依頼外で討伐した魔物に手当てをだす仕組みになっている

また魔物の中には体内に魔力やその他物質によって魔石を持つ個体がいる、魔石はギルドで換金したり、商店で売ることもできる、レートにもよるが拳大の大きさにもなると家を買える程である

コウがせつせと200体のウルフの魔石を有無を確かめていると開けた場所の先、坑道の奥ここからでは暗くて見通せない所から、ズルズルと巨大で重量のある物体が引きずられているような音が響いてくる。コウがそちらに目を向けると音の正体はコウに二つの眼をむけている

徐々にその体躯が光に照らされていくと、現れたのは鉾石に身をやつしたドラゴンだった

「随分と大物が出てきたな」

ドラゴンが広間まで出てくるとやっとその体躯の全貌が頭になる、西洋龍といったところか、その重量から退化していてもその両翼は広げればその体躯と同じぐらい大きくそして圧倒的だった、空想でありながら現代で信仰欲しいままにしていたドラゴンの風格は確かだった

《……汝の様な人の子が、我の領域に何の用だ、あまつさえ共生を許容していた者共の命をなぜ刈り取るのだ、答えて貰おう》

ドラゴンはコウの前までくるとゆっくりと話していく、頭の中に直接響くような声

「…人とあんたらが対等だとして話すが、あんたが許容したウルフたちが人として、その領域に入ることは許容していないし、更に言えばその領域での略奪行為をとても許容できない、勝手に領域に入ったことは謝る、確かにあんたの領域の者をどうにかしたいならあんたに相談するのが筋だろう、だがそれなあんたはここはあんたの領域だと申告してもらわなければならぬぜ」

《ほざくな、なぜ我が人の者に住みかを明かさなければならぬ、それではこの世界は人の者たちのものみたいではないか》

「そうだ、この世界は誰のものでもない、ならばこの一帯があんたの領域だといってあんたに攻撃されるのはおかしいだろう？ あんたが人里に現れれば攻撃されることに憤慨するのと同じ理屈だぜ」

《ならば我がそれを許容したとして、人の者がそれをしないのは容易に想像できる》

「甘えたこといつてんなよ、理想の生活を望むのなら戦えよ人と、世界を人が侵食しようとしたとき静観していたのは、あんた達だろ、人は戦ったぜ、あんたらの同胞や自然、天候なんかともな、そして勝利したんだ平穩を望むなら縮こまって隠れてるか、全面抗争だろ？」

《命乞いの為に知を巡らせているのかと思っていたが、どうやら違うらしいな、我らに宣戦布告とは、面白いこれ以上領域を侵さないのなら汝個人に関しては許容するとする、我ら同胞のちから楽しみにしておけ》

ドラゴンはそう言い捨てると坑道の奥に戻っていった

「これでしばらくは収入が安定するな、下手したら一生だが、とりあえずもし皇国が倒れるとしてもその後には魔の者たちと戦えるのなら良しとしよう」

洞窟にて（後書き）

次回、訓練の風景の後、時間を進めて初戦です

開戦（前書き）

主人公は戦いません

開戦

翌日、先日と同様に訓練所に赴いて今日も基礎体力訓練の様子

「今日も午前中はひたすら走り続けてもらう、午後からは各自で組手だ、それでははじめ！」

教官の掛け声がかかると、絶望していた周りは苦しそうに走りだす

（この前はしくつたな、確かに魔法を使えば耐えられるがあの貴族共や極小数しか耐えれないとはな、この前は手を抜いてたことにすれば今日からでも修正できるか？）

「【重力倍加5】」

コウの体重が5倍になり足取りが行きなり重くなる

（本気を出してるように、この前よりスピードを上げなきゃいけないし、もう頭が重いがこれはホントに訓練なるぞ）

そうして自分と並走していた一団を抜けると後ろからコウを追いかけて来た男がいる

「やあ、昨日は休んでいたけどどうしたんだい？」

カイルである、カイルはコウより半歩ぐらい前から顔を覗かせながら走っている

「ウイングベルか、いや昨日はちよつと野暮用でな」

「カイルでいいって、それにしてもどうしたんだい？今日は昨日よりもハイペースだけど」

「ああ、少し真面目にやろうと思ってな」

「そうなんだ、じゃあ僕も付き合おつかな、このペースだといいい訓練になりそうだ。…ん？この魔力は身体強化じゃない、もつと別の遙かに高難度な、コウ？今自分にかけてる魔法はなんだい？」

「（するどいな）口外したくない技術なんだけどなあ、黙つとけよ？」

「ああ、誓っていい、広めたりしないよ」

「これは重力倍加だ、そのまま体重が十倍、そして内蔵を守る為の体の内部に強制的に強化魔法をかけている、まあ体を動かし難くしていると言った感じだ」

「えっ…、そんな魔法聞いたことないけど…君…何者だい？」

「詮索は無用、強いて言うなら俺が作った、何度も言うが誰にも言うなよ？」

「……………わかったその代わり、僕にもそれやってくれないかい？」

いいぜ、コウはそう答えると、倍率を3倍にまで落としてカイルにかける

「ぐつ、これは相当くるね、こんな状態で全力疾走なんて無理…だね…」

魔法が発動した途端効果は如実に現れた、緩やかなリズムを奏でていた足音に雑音が混ざりそれは足を止めたことを現していた

遠くからの教官の注意を聞き流しながらカイルが体を倒す、カイルは霞む意識のなかで抗えない地面との衝突を覚悟した時

「やっぱ負荷が強すぎたか」

コウはカイルの体を支えながら負荷を解く

「おい起きろ、教官に知られたらことだ」

カイルの頬をペチペチと張りながら意識を戻していく

「ああ、ごめん。でも君はどうして平気なんだい？」

瞳を僅か明滅させながら再び走り出しながらそう訊ねる

「これは結構応用も効く、全ての種明かしは些か野暮だぜ、負荷を小さくしてもう一回やるかい？」

カイル頷く、更に重くなった両の脚に鞭を打って走り出した――

某日、某利益になる資源の枯渇した国、某所

「我々の目的はただ一つこの雪しか存在しない土地からの脱却だ！
！、今こそ暖かい土地に胡座をかいて居座り我々から富を奪い去つ
た者達に正義の鉄槌を！！！！！」

[illegible]

吹雪の吹き荒ぶなかで、ギラギラとした男達の咆哮が響き渡る

「随分と慣れたものだな」そう呟くようにコウは横を並走するカイルの方を向きながら言う、どうやら聞こえていたようで汗の滲んだ顔に苦笑いを浮かべた

重力倍加を日常的に訓練で使用するようになってから早1ヶ月がたちカイルは3倍でも身体強化を最大まで使い3時間走破出来るまでになった、コウは天才は居るもんだと感心している

とはいってもコウは10倍でも生身で走破しているのだが他の兵士もこの頃は午前が終わったときに昼食にありつけないような者は居なくなっていた

今日もそろそろ午前のノルマも終わるな、とコウは思った

「全体っ！！やめっ！！」

教官の怒声のような大声が、いつも通りに訓練が進んでいた訓練場に響く

途端止まる地響きの用に鳴っていた、足音、一瞬で訓練場に静粛が訪れる、それそら欠き消して教官の二の句が響く

「全体、集合っ！！」

半月もせずに兵士に畏怖と尊敬のどちらかを、もしくはどちらとも

を与えた教官が癪癪でも起こしたような様子に皆少なからず動揺しながら集まる

（どうしたんだろうね）カイルが声を潜めて呟く言葉にコウは返さなかった

「…帝国より、皇国に宣戦布告が發布された、これよりこの場に
いる訓練兵は全員各兵団に派遣される、速やかに武装し次の鐘が鳴る
までに、再びこの場に集合しろ」

僅かな沈黙の後

「「「「「はいっ！！」「」「」「」

「
……………」
「
……………」

訓練場は正に混沌と化していた、迅速にという言葉を違えた者は一人も居ない、それでも数人の者しか正しく動けた者いなかった、コウとカイルは互いに言葉は交わさずに歩いていく沈黙を破ったのはカイルだ

「…最悪だね」

それは気分のことを言ったのかそれとも他のことについてかなのか、聞いただけではコウには判断をするのは不可能だった

「…ああ」

とりあえずそれだけ返しておくとして…コウは考えた

（僥倖だな、新兵にも成り得ない奴等の中で、今上はこう考えているだろう、鞘からも抜き差しすることもできない他人の剣で戦わなければいけないのか、とおそらく帝国の思い通りなのだろう対外的に公に新兵を集めるなど正に愚策まあ今回のことで更に篩うことも考えてのことだというのなら話は変わるがな、上がバカだと下は苦労するというのが上がバカでなければ下は甘い汁は吸えない、最高だ）

二人は静かに兵舎に向かっていくとカイルは言葉を続ける

「明らかに錬度がなさすぎる、まさか僕たちに壁役にでもなれとでもいうのか？」

そうゆうことが、っとコウは思う

「確かに統率はとれてはいないが、逆に指揮されることにも依存していない、自分の身ぐらいは守れる奴等だけだろう、幸運なことにスタミナもついてきた、戦争に無関係だったのもお前ら貴族側の者だけだろういざ本番で慌てる奴も少ないんじゃないか？、何にしてもなんとかなるさ、じゃあな」

そう言つて未だ怪訝な顔のまま立ち尽くしていたカイルを置き去りにして歩いていく

「戦場は、そんなに甘くないんだよ？コウ……」

カイルも思い足取りで自室に向かうのであつた

「第十歩兵隊！これより諸君等は皇国の民を守る強固な盾として、帝国の蛮賊共を駆逐する剣として戦つてもらふ！」

着任して間もないのだろうそんな上官の下手くそな鼓舞も無いよりはましなのだろう周りの兵たちからの熱気は凄まじい

広い荒野には千には満たないほどの新兵たちが集まって空はやつと
青が差してきたほどで少し肌寒い早いはなし早朝である

「そして日の出とともに敵地に進軍してもらう」

そして太陽の光が彼らを照らした

開戦（後書き）

次回主人公は無双します

解放してやるさ、死の恐怖からな（笑）（前書き）

主人公戦います

解放してやるさ、死の恐怖からな（笑）

太陽を横つ面に受け自軍が進んでいく

皇国と帝国の間には険しい死の山と皇国では呼ばれている山脈があり帝国はその皇国側に港を造り牽制され続けていた、港から皇国領の境界までの荒野がここである

コウは北上していく集団から徐々に離れていく

既に皇国の兵と帝国の兵とは衝突し敵味方入り交じって戦っている

「じゃあ景気良く花火でもあげますかね release」

戦場に朝日を欠き消すほどの閃光が走った――

交錯した戦場、隣にるのが味方なのかわからず得も言えぬ恐怖が頭を支配した

「声を掛け合え！、身内殺しはだすなよっ！」

今日知った上官の声は、今日会った同胞の声を聞き分けるといつて
いる

隣にいる死に体を強ばらせて、更に混乱していく思考

次に身を焦がすような・・・・・・

[illegible][illegible]

何の兆しもなく唐突に、仲間が爆発した

混濁した戦場で同時に到るところで、味方も敵も巻き込んで

しばらくすると焼け爛れた皮膚の痛みが遠退いていくとともに視界が真っ黒に・・・

「フッハッハッハッハッ！！！！」

コウは今自分があげた花火を見て満面の笑みで嘲笑う

「改造版「命の音」、威力はそのままに大分使い勝手を良くしたかな、上々ってところか、そもそも能力にリスクなんていらんし」

見渡せば荒野には立ってるものは殆どおらず、コウは今が好機と帝国の陣に向かっていく

静かな荒野を進んでいく帝国の陣が見えてくる、そのまま将がいるだろう天幕に走るが将を守護するものが立ちはだかる、混乱は少なくともしているだろうに良く教育しているな、っとコウは思っても足は止めない

駆けるように切り伏せていく、突然の奇襲にも関わらず守護兵達は統率された動きでコウに向かっていった、コウの進路に立ちはだかり、攻撃から免れ抜けられた者はコウに追撃を仕掛ける、次第にコウは八方を囲まれるが追い付かれる前には、ひたすらに前進して守護兵の間を抜けていく天幕の入り口を切り裂くとそこには立派な軍服を着た、デブがいた

「ええいつ！私は帝国軍しょっぶひいつ！」

言葉を遮って一太刀で首を落とすとそれでも断末魔をあげたデブの首を拾うと、さっき生き残った兵が入ってくる

「この狼藉っ命をもつぐはあっ！」

「生きてはかえさなっいいい”い！」

入り口を塞いでいる兵を斬り、守護兵の追隨を振り切りそのまま皇国軍陣営に向かっていく、太陽はまだ真上で輝いていた

刻は夕刻、戦場は静粛が包んでいた

停戦から半刻しか過ぎていないはずの戦場にあるまじき程である
開戦直後とも言えるタイミングで両軍に大幅なダメージを負わせた
謎の大爆発、その後帝国軍ではこちら一帯を指揮していた將軍を
失った、しかし將軍の死は、大爆発による混乱に飲み込まれていき、
結果的に皇国の新兵軍と帝国の指揮の失った兵達の力は拮抗し両軍
が全滅寸前に至り痛み分けの形で停戦を迎えた

解放してやるさ、死の恐怖からな（笑）（後書き）

次回、主人公はやりたい放題

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7035p/>

とある世界の一等兵

2011年9月5日12時19分発行